

環境問題メモ

渡辺 隆一*

ゆるやかな起伏をもった高原は見わたす限り背の低い草地で、その中をうねったように一筋の道路が遠く続いている。それでも、所々の集落にはやぶ状の竹林があり、その竹で編んだ家がいくつかたまっている。ニューギニア高地で私が見た最も一般の風景はまずこのようなものだ。つまり、焼畑によって一面が草地化してしまい、もはや森林に復帰しえないといわれている硬いイネ科草原が、このあたりでは最も広い面積を占めているのである。温度や降水はもちろん十分にあるのにもはや森林に回復しない。森林を焼いては作物を植えて数年後には放棄してしまい、森林の回復を待って、また焼畑に利用するという伝統的な一種の循環的利用方法が、近年にいたってくずれかけてきたのだといわれている。

広大な焼畑は、緑したたる熱帯のジャングルを夢想してきたものにはそれ自体大きな自然破壊にうつる。しかし、その自然はその住民の生活を支え、また一定程度の面積を確保しつつ、長い年月にわたっていわば調和的に存在し続けてきたものであり、その点では、他国者がとやかくいえるものではないのかもしれないが、今はどうだろうか。ここでもまた、人口増加圧が、かつての伝統的な焼畑システムを崩壊し、生活を支える再盤である自然の生産力を大きく低下させてしまっている姿をみることができる。遠く熱帯の地域でみたこの自然と人間社会のシステムの不調和は、劇的で目に見えるだけに具体的に世界全体への環境問題へ想いをはしらせるにたるものであった。

ひるがえって、日本の自然は今どれほどに我々の生活を支えつつ、どのような方向に変化しているのであろうか。自然そのものが生活を直接支えているような目に見える場面は我国では圧倒的に少なくなり、今自然の保護を主張する論拠は、人間生活の精神面を強調することの方が多し。もちろん、多くの公害に代表されるように自然環境が直接生命維持に危険なレベルにまで悪化している場合すらあるのだが、そこにおいても、なおいっそう強く、精神的にも満ちたりうる自然環境が要求されているのであろう。砂漠や焼畑の国からみれば、日本の自然はなるほど緑が多いといえるだろう。しかし、多くの人達は今この日本の自然の現状で満足しているのだろうか。多くの環境意識調査は、緑が十分にあるとは感じら

れていないことを示している。では、どの程度の自然があれば、人間は精神的・文化的に満たされうるものだろうか。今のところその答えは出しえないだろう。それは、人々の自然の認識の程度と、それによって規定されるであろう、社会の自然への対応の程度とによるのであるから。前者についていえば、まさにここにこそ、自然教育の必要性と重要性があるのであり、我が国においては、きわめて不十分というより、まったくとりまかれていないといった方がいいだろう。後者についていえば、環境アセスメント方法のより科学的な適正化といった研究のみならず、より広汎な地域住民の意識の集約化といった社会政策的な面での重要さが浮かびあがってこよう。そしてまた、この面では現場の必要性から応用面ばかりが先行し、基礎的な研究や討議は不十分に思える。

日本の生の自然の姿は環境庁等の公機関の調査や、空中や衛星からの直接情報によってかなり詳しく知られてくるようになった。しかし、そのための基礎的な科学、“自然の科学。(前報1982)は、いまだ十分に発達してはいない。また、その自然といかに人間社会とがつきあっていくかについての社会的コンセンサスは個別地域についてすら得られてはいない。こうした未熟な状態を脱脚するため、関心ある人達は個々に環境教育等のさまざまな運動を展開し、それぞれに成果をあげたりもしている。一方では、環境庁を始め自然保護協会等の公的、私的全国機関が、こうした個別の運動をいろいろな面でフォローし、また広汎に組織化しようともしている。

こうした自然と社会の現状の中で、本研究会もこの複雑かつ広汎な環境問題を“信州の自然環境モニタリングと環境科学の総合化に関する研究、という統一的なテーマに集約して進めているわけである。このテーマは、今後とも環境科学における大学院、研究所構想等の実際上の動きとも連動しながら、このテーマの内実を深めてゆくことが最も重要だと思われる。テーマは信州という限定された地域であっても、以上の論点からもおわかりのように、この問題の広がりは極めて広汎なものであり、それらを基礎にふまえた本研究会の活動は今後ますます重要なものとなり、その大学内外にわたる役割も大きくなっていくことが考えられる。そのためにも、本研究会のいっそうの前進に尽くしたいと思う。

* 信州大学教育学部 Fac. Edc., Shinshu Univ.